

Title	著者リプライ
Sub Title	
Author	阪本, 博志(Sakamoto, Hiroshi)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2020
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.25 (2020. 11) ,p.119- 120
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20201120-0119

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

著者リプライ

阪本 博志

はじめに、拙著『大宅壮一の「戦後」』を書評対象としていただきました編集員会の先生方、またご多忙のところご書評をたまわりました佐藤卓己先生に厚く御礼申し上げます。

2008年5月に拙著『『平凡』の時代——1950年代の大衆娯楽雑誌と若者たち』（昭和堂）を上梓するのと前後して、『文学』2008年3・4月号に「大宅壮一研究序説——戦間期と昭和三〇年代との連続性／非連続性——」を公表いたしました。本書は、それ以降約10年間に発表した拙稿をまとめたものです。

大宅の研究を進めていくなかであたまにあった言葉があります。それは、『『平凡』の時代』を刊行してすぐの2008年5月18日付『日本経済新聞』朝刊に掲載された、佐藤先生のお書評の「五〇年代の大衆雑誌として「戦前との連続性」がもっと指摘されるべきだとも思える」とのお言葉でした（現在は、佐藤（2012）に収録。引用は同書より）。

今回佐藤先生から頂戴したご指摘を私なりにまとめますと、次の2点になるかと思えます。第1に、「メディア史的に大宅の活動の連続性をせつかく丹念に跡付けながら、凡庸なジャーナリズム史の枠組みに議論を回収しているように見える」点です。第2に、「総力戦パラダイムにおける「戦後」とは、第一次世界大戦後のことであり、「一九二〇年代と一九五〇年代の大衆社会化も殊更に区別する必要などないのである。結局、第一次世界大戦後に編集・評論活動を始めた大宅壮一は最初から「戦後知識人」だったのではないのか」という点です。

第1の点について私は、『図書新聞』第3439号（2020年3月14日）に掲載された、毛里裕一氏による拙著書評における次のご指摘と関連したかたちでとらえました。「大宅壮一の戦中・戦後の文筆活動に連続性が確認できたとして、そのことの意義を今日どう評価すべきか」。佐藤先生も毛里氏も、大宅の戦中・戦後の連続性を検証した、いわば「その先」のことを問うておられると私は認識しています。

この点については、次のように考えています。第一章で大宅に関する代表的な論者のひとりとして、大澤聡氏（大澤2015）を挙げています（18頁）。このことにもあらわれているように、管見では大宅についての研究は、戦前の文芸評論家時代について国文学の領域でなされることが多かったと思います。戦後の大宅については、たとえば竹内洋先生が「戦後日本を考えるうえで」大宅のような、「一流とはみなされなかったものの、多くの読者をもった知識人や文化人を研究することがむしろ重要であると思う」（竹内2012：28-29）と指摘されています。このように「マスコミの王様」とまで呼ばれた国民的評論家であったという重要性にもかかわらず、戦後の大宅についての研究は未開拓のところが広く残されていました。

阪本博志「著者リプライ」

『三田社会学』第25号（2020年11月）119-120頁

「あとがき」で私は、2020 年 11 月の大宅没後 50 年をひとつの節目に大宅にまつわる議論が活発になされることを期待しており、本書がそのための何らかのたたき台になれば幸いである旨を書きました (323 頁)。こうしたことから、戦後の大宅を論じるにあたり、まずは大宅の活動の連続性を跡付けておくことが、議論をするうえでの土台になるのではないかと考えています。私自身も、この土台を踏まえ、「その先」を探究していきたく思います。

第 2 の点については、第七章の結論部分において「今日の情報化社会への流れの始原たる戦間期」(179 頁) に大宅が活動を開始したことを確認した(「著者がそれに気づいていなかったわけではないはずだ」とのおおりのす)うえて、「(第二次世界大戦の後という意味での)「戦後」」(181 頁)の活動について論じました。

「(第二次世界大戦の後という意味での)「戦後」」の出版メディア・活字メディアと社会は、私自身が、拙著『『平凡』の時代』、拙編・解題『高度成長期の〈女中〉サークル誌——希交会『あさつゆ』』全 10 巻(金沢文圃閣、2017 年～2019 年)、影山三郎著(拙編・解題)『朝日新聞家庭面「ひととき」欄の三十年——戦後マスコミ読者論』全 3 巻(金沢文圃閣、2019 年)そして本書にいたるまで一貫して問題意識を持っている対象です。

このことから、「一九二〇年代と一九五〇年代の大衆社会化も殊更に区別する必要などない」というご指摘についても、第一次世界大戦後において、1950 年代～1960 年代、そして現在がどう位置づけられるのかを引き続き考えていきたいと思ひます。

先に「土台」という言葉を用いました。私自身も、本書を土台に、「その先」にあたる大宅の研究を引き続きおこなうとともに、戦後メディアの研究を積み重ねていく所存です。

前著に続きご書評をいただくとともに、前回と同じように今後の課題をお示しくださしました佐藤先生に、改めて深謝申し上げます。

【文献】

大澤聡、2015、『批評メディア論——戦前期日本の論壇と文壇』岩波書店。

佐藤卓己、2012、『現代史のリテラシー——書物の宇宙』岩波書店。

竹内洋、2012、『メディアと知識人——清水幾太郎の覇権と忘却』中央公論新社。

(さかもと ひろし 宮崎公立大学人文学部)